

第一講

—

おはようございます。「僧伽的人間」というテーマをいただいたんですが、じつはこの講題は私が取り上げたテーマではございません。今回はこの会のお世話をしてくださっている方々がどういうふうな話し合いをされたのか知りませんが、私には「僧伽的人間」というテーマでお話したいと。私もそのときどういふわけでこういうテーマが選ばれたのか、その時にお聞きすればよかったかなあと後で思いましたけれども、大地の会のことでございますからそのまま鵜呑みにしていたんですが、さてと思って考えてみますと、やはりどういふわけでこういうテーマが取り上げられたのか、その辺が私にはよく分かりませんので…、ただ「僧伽的人間」という言葉は安田先生が念仏の信心を得ることによって成就する人間を「僧伽的人間」という言葉で言い表しておりました。

また、ただそういうことを安田先生が言い表しておられたということだけでなしに、むしろ先生の一生が、いわば僧伽的人間という言葉で言い表されているような、そういう一生をおくっておられるなあとということを私自身つねづね感じておりましたから、そういうようなことを問題になさったのかどうか分かりませんが、まあとにかくそういう先生が僧伽的人間という言葉で言い表そうとなさったその心を思い浮かべながら、今日私自身の上で問題になっているようなことをまずは話し申し上げたいと思っております。

で、私の上で問題になっているということはどういふことが問題になっているのかと申しますと、いったい「人間とは何か」と。そういうことがとくに最近切実にあらためて問題になっているわけでございます。それというのも、ただ私個人の中でそういうことがしきりに思われるということだけでなしに、どうも今日の時代社会がそういう人間とはいったい何かというようなことを問うているようなそういうことも同時に感ずるわけでございます。考えてみますと妙な時代ですね。しきりに人権を尊重しなけりゃならんというようなことが叫ばれる。あるいは、やさしさが人間の道であるというようなことが、いろいろな形で取り上げられている。ときおりふつと思ふんですけども、儒教の道徳が現代によみがえってきたのかなと、こういうふうにも思いますですね。

ご承知のように儒教のヒューマニズムはその中心が「仁」ですね。今日の言葉でいえば、「やさしさ」とか「思いやり」ということが 仁という言葉で言い表されている内容ですね。そういうことがどういふわけかまたあらためて今日の時代に“やさしさやさしさ”というような言葉がしきりに取り上げられまして「地球にやさしい洗剤」とかなんとか、まあ人間だけでなくあらゆるところでやさしいやさしいという言葉がやっているといひますか、どうも僕は、まあ別にそれに反発を感ずるというわけでもありませんけれども、嫌だなあという感じがたく感ずるんですね。なにか妙なものがということを感じますね。

それからこれは今に始まったことではありませんけれども、「自由」とか「平等」ということをしきりに主張する。そういうような人権を尊重しなければならぬとか、なにかやさしいのが人間ではないのかというようなこととかあるいは自由とか平等というようなことがしきりに主張されればされるほど、その反面、いったい人間とは何だろう、というようなことを考えさせられてしまうような出来事もつぎつぎに起こるわけですね。

つまり人権尊重ということが主張されればされるほど、人間が明らかになるのかといふやうなことでなくて、むしろ反対にいったい人間は何だろうと、人間とは何ものなのかと、こういうことを思わず考えさせられる出来事が起こりますし、やさしさということについてもそうですね。なんかそんなあまいものじゃないぞというような問題がつぎつぎに出て参ります。そういうことでいったい人間といふけれども人間とは何かと。あるいは何ものかと。こういうようなことをやはり今日の時代社会がいろんな形で問いかけ呼び

かけているというふうに僕は感ずるわけです。それだけに先程申しましたように、いよいよいったい人間とはなんだろうかというようなことが私のうえで問題にいつもなるわけであります。

もちろんひとの話ではなくて、自分が人間に生まれてきているわけですから、いったい人間とはなんだろうかと。そういうことでこの「僧伽的人間」というテーマをいただきましたけれども、まずはそういうところから、そして先程申しましたように「僧伽的人間」という言葉は安田先生がお使いになり、安田先生の生涯が、まあいわば僧伽的人間を明らかにしてくださっている。もし僧伽的人間とは何かということをつねねるとしたら、先生の生涯をつねねればもういろんなことを語るよりはっきりしてくると、こういっていいような事じゃないかと思えますけれども、まあそれにしても、私自身がそれではどういうことを僧伽的人間という言葉の中から、あるいは先生の生涯からどういうことを学び、どんなことが問題になっているかということは、また後から申し上げたいと思います。

## 二

ともかくも、そういう人間とは何かということが、現在の私自身の上でいつも問題になってくるわけですが、こういうことは考えてみますと、ただ私の上にとりよりも、昔からずっと問題になっていることなんですね。今日人間学という学問がございます。私自身専門に人間学という学問を勉強したわけではありませんけれども、生かじりにそういう本をいくらか読んだりして、その人間学という学問の上で取り上げられておるいわゆる人間観と申しますか、そういうものを少し取り上げてみますと、だいたい人間学では三つの類型で人間をとらえていますね。まあ、きっちりその中にはまってしまうというわけでもないんでしょうけども、やはり一応オーソドックスなど申しますか、人間学という学問の上では人間を三つの類型に分けて取り上げているものが多いようです。

一つは、これはまあ別にラテン語を使う必要はありませんが、私はラテン語が分かるわけではありませんから、ただまあ、そういう書物を読みますとしきりに出てくる言葉が、一つはホモ サピエンス (homo sapiens) という言葉ですね。いろいろな言葉で翻訳されていますけれども、私なりな言葉で申しますと「考える、それが人間だ」と。sapiens というのは〈かしこい〉という意味らしいですね。こういう言葉はもともと、私はラテン語とかそういうものをぜんぜん知りませんから、ただ割合有名な言葉ですね。ホモ サピエンスというのは。あるいは考える人といってもいいですね。人とは考える人だと。ロダンにそういう彫刻がありますね。考える人。あるいは別の言葉では知性が人間の本性だと、こういうような知性とか理性で人間をとらえておる。そういう人間観ですね。その中で非常に有名なのは、ソクラテスの「汝自身を知れ」というああいう言葉で言い表されているのが一つの類型として人間学などで取り上げられている一つの内容ですね。

それからもう一つは、ホモレリジエンス (homo-religiosus) という言葉で言い表されているのは「信仰、それが人間だ」と。平凡な言葉でいえばそういう意味が言い表されている言葉だといっているのじゃないでしょうか。霊性、それが人間の本性だと、こういうわけですね。

東天王町(大地の会会場、岡崎別院に隣接する町・編集部注)のところに成長の家の道場みたいな建物が建っていますが、今朝見ましたら「神性開発錬成会」だったかな、はっきりしたことを忘れましたが、とにかく神性を開発する、そういう研修会みたいな、錬成会みたいな修道会みたいな会がずうーと開かれておりました。これは今全国的に開かれているのでしょうかね、この前長岡に行きましたら、やっぱり駅を降りたらすぐのところ、横幕に大きく成長の家のそういうものが出ていました。それには“人間は神の子だ”と。そしてその後には神性開発というこういうようなことが取り上げられておりました。そういう人間を、成長の家がどのようにとらえているのか知りませんが、言葉の上だけで申しますと人間は神の子だと。霊性を神性というふうに表現しているわけですね。霊性それが人間だと。人間の本性だと。こういうところに目を据えている人間観でしょう。こういうことが人間学で第二の類型として取り上げられる人間観ですね。

それから第三の類型として取り上げられているのはホモファーバー (homo-faber) ですね。これは工作するとか作るという意味らしいですけども、作る、それが人間だと。いろいろのものを作る。それが人間だ

と。生産する、それが人間だというような。あるいは行動する、それが人間だというようなことを言い表している言葉ですね。まあこの言葉のことはともかくとして、そういう人間観、人間とは何かと。

ですからこういう人間学で取り上げられておられるような、これまでのいろいろな人間観を整理して、人間の歴史がたえずたずねてきた、そしてそれぞれいろんな時いろんな所において見い出してきたと言いましょか、そういう人間観を大きく三つの類型に分けて人間学では取り上げておられるようです。とくに最近、これは人間観というわけにはいかないんですが、最近科学技術が非常に発達してきましたから人間を物としてとらえる。「観」というときには、世界観でも同じですけども…、世界観と人生観は深い関係をもっている言葉で同じように使われている場合もありますが、とにかく人間観とか世界観、あるいは人生観、観といわれている場合は少なくとも人間を受け取っていく態度ですね。ただ知らん顔して“いったい人間とは何だろう”と、何かの知識的な興味でそれを外からいろいろ研究する、そして“ああこれが人間だ”と分かったと、そういう場合は人間観という言葉は使わないんですね。そういうことをとくに問題にしておられる人、もう亡くなったけど、ハイデッガーという人が『世界像の時代』とあって、そういうテーマでお話なさったことが本になっていますが、「世界像の時代」というのは世界観が見失われている時代。「世界像」とハイデッガーが言っているのは自然科学の力でいったい世界とは、人間の世界にしる自然界にしる、大体世界を自然界というふうに取り上げるようになってきたのは科学が発達してきたからですね。つまり物としての自然ですよ。自然現象。それ以前は世界は神々の世界であったり、たんなる自然界ではないんです。そもそも世界を自然界というふうにとらえるのが、世界をほんとに自分の身に受け取っていく態度ではないです。たんに研究対象です。山や川や草や木と一緒に暮らしていく態度で、いわゆる自然界なら自然界を見ておるわけじゃないです。そういうことをちょっと離れて、つまり世界でもそうですが、人間ということでもそうですが、ほんとに人間に生まれてきた、その人間の身を受け取っていく。どういたって行けばいいのかわかですね、そういう受け取っていく態度。だから受け取っていくというときには、たんに“人間とは何か”とって知識的に知るということだけじゃない。そこに「情」とか「意」とかいうことが入る。情というのは喜びとか悲しみ、それから情熱、ほんとにこの身をいたっていきこうというような情熱とか、この身を受け止めるということに悲しみを感じる、この身に悲しみを感じず。それから意志、意欲とか意志。このように生きて行こうというようなね。

毎回どの先生もお話なさるときに三帰依文を皆さんと一緒に唱えますけれども、その一番最初の「人身受け難し、いますでに受く」と、受け難い人の身をいますでに受けることができるようになったと。そのように「人身受け難し、いますでに受く」と受け取っていく、いたっていき、そういう態度ですわね。その場合に三帰依文で述べられている「人身受け難し、いますでに受く」といわれる人身とはどういう人の身と言い表しているのか、こういうことが大きな問題でしょう。不幸な身をいただいたということなのか、悲しむべき身をいただいたと、こういうことなのか。やはりそこに情あるいはその身をいたってこれから自分の一生涯を、自分の一生涯はいたっていきことに尽きると、こういう意志とか、こういう「情」とか「意」が入ってくるのを観と。人間観とか世界観とかですね。

ハイデッガーという人はそういうことが失われたということを嘆いて問題にしておられるわけですね。「世界像の時代」と。つまり世界を見るといってもただ研究対象みたいにして見ている。科学的に分析して、そこには情も意も入ってないです。喜びとか悲しみとか情熱とか、そういうものがその中に入っているわけじゃない。ただ地球は何だ、宇宙はどうだとね。こここそが私の生きる場所だと。それをいたって、いたたくにしてもそこに喜びとか悲しみとかそういう情、それから意志、そういうものがどこかに飛んでしまっ、ただ世の中はどうだ世界はどうだとね。それがまた人間についても人間を物のように分析して…。

### 三

昨日大河内さんが「脳死」の問題を少し取り上げておられましたが、ああいったこと自身が物のようにして取り上げておる一つの姿でしょう。物に生死がほんとうはあるわけではないでしょうが、何か物の生死

たいに物の死のごとく取り上げる。分子生物学が発達してDNAの研究が非常に進んできていますが、そういう場合もDNAだけで生命というものが論じられる場合には、そこに情意は入ってきません。つまり情とか意が働かない生命といえばそれは生きておる生命じゃないです。命とはこういうものだ、それは命の知識であって…。道元禅師でしたかね、『正法眼蔵』に「生死」ということが取り上げてある。「生死はすなわち仏のおん命なり」こういう言葉があります。ああいう「おん命」といわれる命ですね。それはDNAを研究すれば分かるという命じゃないですね。

とにかくそういう人間観、人間とは何か、人間とは何ものなのかということさえ見失ってしまうような時代です。つまり人間を物として研究する科学が非常に発達してきましたから、そういう意味でいえば人間観といってもこれまでいろんな形で人間観が表され、先ほど申しましたように大きく分ければ三つの類型に分けることができるとさえ人間学などではいわれているのですけれども、そういうさまざまな人間観であるにしろその人間観すら失ってしまっている。そういう意味では成長の家の方々が、ああいう「人間は神の子である」という一つの人間観をピシッと立てて、その神性を回復するのだといって錬成会を開いてやっておられる。やっぱりそういうところに非常に大きな魅力を感じておられる人がたくさんいらっしゃるのじゃないでしょうかね。

人間が何であるのか分からなくなってしまう。ですから「人身受け難し、いますでに受く」というああいう言葉を聞いたら笑い出すのではないかと、何を言っておるんだと。「人身受け難し、いますでに受く」何をそんなもったいぶってと、それほどある意味では人間観というものが遠く切り離されている時代なんです。全然消えてなくなっているのじゃないですけども、しかし遠く切り離されている。つまり人間とは何かと、人間観ですわね。それを化学的に分析することではなくて、いただいていくという態度から、人間に生まれてきたんだと、この人間に生まれてきたこの人間とは何かと。人間に生まれたんだけどもこの私は何ものかと、そういう意味で人間をたずねるにしてもそのことが混沌としている時代じゃないでしょうか。

先ほど成長の家の例を取りあげましたけれども、成長の家で取りあげられるようなそういう人間観で生きていらっしゃる人もおられるでしょう。それにしても科学で取り上げられるこれは人間観というよりも人間の姿ですわね、ハイデッガーのような取り上げ方をすれば人間観でなくて「人間像」ということになりましようね。とにかく混沌としている。そういうことに一つ目を据えてみますと、じつは、すでにこれまで、そういうことが幾たびも取り上げられてきた。それはほかならん「称名念仏」の歴史じゃないでしょうかね。つまり人間とは何かということを見失ってしまった。何かそういうことを押し立てている人がいないわけじゃないけれども、しかし全体としては混沌としている。そういう混沌とした中であって新たに人間というものを問題にし、人間を見い出していくと、こういうようなことが真正面から取り上げられているのがナンマンダブツの道じゃないですかね。

とくにそのことでは、そういう問題をとくに代表的に取り上げられているのは道綽禅師ですが、「化身土の巻」に親鸞聖人が、『安楽集』の文を取り上げております。

ここをもって、玄忠寺の綽和尚の云わく、しかるに修道の身、相続して絶えずして、一万劫を径て、始めて不退の位を証す。当今の凡夫は、現に「信想軽毛」と名づく、また「仮名」と曰えり、また「不定聚」と名づく、また「外の凡夫」と名づく。未だ火宅を出でず。

(聖典 p358)

少なくとも人間とは何かというそういう問題を見失っている。これはそこに修道という言葉が取り上げられておりますが、仏教が明らかにしている人間というのは、とくに大乘の仏教ですわね、修道ということなんです。修道、それが人間だ」ということを明らかにしているのが大乘の仏教です。つまり人間そのものを修道として見い出した。まあ今日の言葉でいえば存在を問うというような…。存在といっても具体的には人間に生まれてきているということですから、人間に生まれてきておることを問う。なぜ人間に生まれてきたのか。また、人間に生まれてきたということのもっておる一生涯とはいったいどういう一生涯なのか。それが自己を問うというような言葉でも言い表してありますわね。清沢先生は「自己とは何か」という言葉で言い表してある。古くからの言葉では修道という言葉で言い表してあるですね。

これはソクラテスにも似たようなといいますと変な言い方ですけども「人間とは常に彼自身を探求しているもの」というふうにソクラテスは言い当てています。人間とは常に彼自身を探求しておる。何か修道という意味をソクラテスの表現はそういうような言い方ですね。探求している。とにかく大乘の仏教が明らかにしてきた、つまり大乘の仏教の智慧です。人間を修道、それが人間だと。人間があってそれから道を見つけて歩きだす、そういう意味じゃないですよ。人間とは修道。自己という言葉を使うなら自分自身を限りなく見出ししていく。あるいは別の言葉でいえば限りなくこうして生きていることを問わずにはおれない。なぜ生きているのか。なぜ生きねばならんのか。生きていることの意味をたずねずにはおれない。存在を問うということですね。それが人間なんだと。ということに眼を開いたのが大乘の仏教です。

ですから今『安楽集』の中に修道という言葉が出ておりますでしょう。しかも「修道の身、相續して絶えずして、一万劫を徑て」といって、永遠の道ですわね。日ごろ私どもが馴染んでおります仏さまとか菩薩とか声聞、縁覚とか凡夫というこういう言葉は、修道の道程の上に立てられている名なんです。修道の道程ですね。いわゆる位といわれる位置、道程、位といっても位置ですね、どういうところに立っているのか。修道の道程、永遠の道とっていい修道の道程のどういう位置に立っているのか、その位を表す名として凡夫と。あるいは声聞、縁覚、菩薩、仏。こういう名は修道ということを離れてしまいますと意味をなさん言葉です。修道を離れたら仏さまもなけりゃ凡夫もない。まあ一応そういうことを離れて言葉が使われたりしていますけど本当は意味をなさない。なんでわざわざ凡夫とか仏さまといわなきゃならんのかですね。大体こういう言葉というのはやっかいですね。

昨日大河内さんが got の話をされたですね。got を日本語にどう翻訳するかと。何か話によると多数決で神になったという話も聞いてますけど、ほんとか嘘か知らないですけどね。仏と翻訳する説もあったとかいう話ですけど、どっちがよかったか分かりませんが。ヨーロッパにも仏さまがいらっしゃる、バイブル読むと仏さまがぞくぞく出てくるというようなね、案外そっちの方が良かったかもしれないですね。混乱するかもしれないけども、また別の意味ではね。それほど言葉というのは面倒なもんですわね。

#### 四

とにかく凡夫という言葉で表されているのは「十信の位」といわれる、信というのは教えを聞き教えを理解する、それに十の道程がある。そこに教えを聞いて、教えといってもどうして生きているのか、人間とは何かとこういうことについての教えですわね。いろんなことについての知識じゃありません。こうして人間に生まれてきたということはどういうことなのか。そのことについて教えてくださる教えを聞きそれを理解する。それに十の道程がありますから十信と。それはもうその教えを何らかの形で教えに触れるわけですから、いったい人間とは何だろうかというようなことに心を動かして、教えを聞き教えを理解していこうとしている人たちです。

今道禪師が「外の凡夫」といわれたのはその外なんです。十信は外の凡夫ですが、厳密に言われるときにはですね、その外ということはもう全くそんな人間とは何かとかそういうことをたずねようとも思わない。教えを聞こうとも思わない。親鸞聖人は「屍骸」という言葉で言い表されます。「逆謗の屍骸」。これはご和讃に出ています。『教行信証』の中にも「屍骸」という言葉が「行の巻」に取り上げられていますけれども、曇鸞大師の徳をたたえる和讃ですね。493 ページですか、「名号不思議の海水は 逆謗の屍骸もとどまらず 衆悪の万川帰しぬれば 功德のうしおに一味なり」と。生ける屍ですわね。ロシア文学にそういうテーマの小説がありますね。生ける屍。

つまり人間とは何か、自己とは何かとかですね、そういうことが本当に問題にならない。また仮りに問題になっても混沌としていて問題が持続しない。じつは本当に限りなく持続するそれを菩薩という名で言い表すのでしょ。別の言葉で不退転ですが、修道に不退転なんです。修道ということに退転しない。そういう位、それを十の内容で表している。「十地」といってですね。普通はどんどん退転して行く。「外の凡夫」というときの「外」という場合は退転するもなにも初めから修道というようなことが問題にならない。自己と

は何かとか人間とは何かというようなことを、あるいは人間に生まれてきたことをいただく、そういうようなことからある意味で切り離されている。自分で離れているということですけどね。そういう在り方をしているものを「外の凡夫」と、こういうふうには『安楽集』では言い表してあります。親鸞聖人は「逆謗の屍骸」といいますね。そういうことが本当に身につまされて感じられるようなそういう時代になったいるなあということを僕は感じるんです。それはひと事じゃなくてね。

じつはそういう時代を生きている。だから人間とは何かということをやなかなか問題にできない、そういう時代に身を置いている。これはですね、思想というものは面倒なもので、その時代の中にある思想が定着しますと、考えるということを停止させてしまうような力をもってしてしまうのです。先ほど言いました人権思想でもそうでしょう。誰も人権ということに疑問をいだかない。人権は当然あるものだよね。これは大河内さんも昨日取り上げていたけれども、何を根拠にいったい人権ということが成り立つのかですね。そんなことを考えやしない。とにかく人権人権と。人権はあるんだと。あるところでそういうことが問題になったときに、私が思わず“人権はあるんですかねえ”と言いましたらえらい変な目で見られました。非常に人権を主張なさる人がいて、議論の中で思わず私たちに人権があるんですかねと言いましたら、ちょっと物議を醸しましたけども。

とにかく人権だけじゃないでしょう。自由でなければならぬ平等でなければならぬとかですね。やさしさということも常に問題として取り上げられるけれども、こういうことがひとつ定着しますと、そうすると考えるということを放棄してしまう。いったい人権があるのだろうか、もしあるとしたら何によって人権というようなものが成り立つのだろうかとかね。あるいは自由とはいったいなんだろうか、平等というのはどういふことを平等というのだろうか、そんなことを考える、問題にするということがもうできなくなってしまうような力をもってくるんですね。思想というものは。今日そうでしょう、民主主義批判なんて出来ませんよ。簡単には。そんなことを批判したらすぐ反動といわれる。あたまから。批判という意味は民主主義で何だろう、もう一遍考えなおそうじゃないかと。でもそういうことを一言でもいうなら、そういうことは反動のいうことだと、こういうふうには思想というものは定着すると思考を停止する。それから聖域になります。批判を許さない、絶対的な意味をもつですね。そういう時代だからこそ、先ほど申しましたように人間とは何だろうかとかそういうことがなかなか、ある意味でいけばどんな人の中にも渦巻いているに違いないと思うんですけど、そういうものも表に出させないような雰囲気をもっている時代です。そんな話を持ち出したら「暗い」なんていわれて“明るく行こうぜ”なんて話になって、ぜんぜん話にならん。おもわずそういう問題をもっているのは暗い人間なのかと。そういう時代、そういうことから時代から促されるといいましょうかね、今まで私なりにもっている人間観、そういうものをもう一つ突き破って「人間とは何ですか」とこういって時代が問いかけている、そういうことをひしひしと感じております。

## 五

私個人の上では、この「人間とは何か」というようなことが問題になり始めたのは敗戦が一番大きなきっかけでした。つまりそれまでの私がおもってあった、おもってあったというべきか、教育を受けていつの間にか身についてあったというべきか、とにかく人間観が、あるいは人生観が壊れた、敗れたわけですね。本当に敗れたんだということは後になって気づいたことですけど、そのときはただ自分が敗れたんじゃない国が破れたんだとこう思っておりましたけどね。自分が破れたんだということは随分たってからで、今にして言えることなんであってそのときは国が破れたと。いったい俺はどうしたらいいんだろうと、こういうようなことでしたけども。

だけどやはりそれなりに自分の人生を新たに考えざるを得ないそういうところに押し出されてきて、民主主義運動といいますか労働運動といいますかね、いろんな運動になんとか関心を持ち、その中に身を置いてきたんですけども、やはりそういうことの中でかすかではありましたがたえず気になったんですね。いろんなことをやりましたが、人間とは何だろうかということがもう一つ決まらない。万国の労働者団

結せよと。人間とは労働者なのか、もう一つははっきりと言えないこともないけど何かそれはある一面であって、悩んだり苦しんだりすることが抜け落ちて威勢のいい人間みたいだね。だけどずいぶん長い間その中に立てこもっていました。先ほどの人間学の類型の中でいえば、第三の類型の中に入るといってわけでしょうね。

そういうことがいろんなことにぶつかる事を通して改めて問題になり始めたところで曾我先生に出会ったんです。もちろん出会ったといっても初めから曾我先生の言われることに心を打たれて“ああこれだ”というそんなことを感じたんじゃない、初めはチンプンカンプン、ほんとにこんな訳のわからない人がこの世にいらっしやるのかと、初めてそういう意味で興味をもちました。だいたいその言われることが訳がわからんと。

曾我先生にお目にかかったのは30近くになって初めてお目にかかったのですが、曾我先生を通して曾我先生に出会うという感じがわいてきたのは随分たってからですね。十年くらいかかったでしょうかねえ。たしか35～6のころにこの大地の会の、宮城さんたちと一緒に発起人になって、まだまだ曾我先生に十分に出会いきれずにおおころでした。

そもそも曾我先生に出会いきれただけじゃないナンマンダブツの本願に出会いきれずに、なんかいろいろ聞いてきたけれども、もう一つ出会い切れない。いったい如来さまの本願とはなんだろうかと。南無阿弥陀仏の本願とはなんだろうかとということも改めて聞き直したいという動機で、それについても『大無量寿経』に説かれている如来の本願をほんとに改めて聞き直して行こうということで、その中心は安田先生にお願いしようということになって、そのときに曾我先生と金子先生にはもちろん出でいただく会だったんですが、そういうようなことを経巡りながら曾我先生に出会うようになりました。

どんな曾我先生に出会ったのかといいますと、「人間とは何か」ということに悪戦苦闘しておられる曾我先生に初めて出会ったんです。曾我先生というのはそういう方なんだということをおぼんたくってから…。曾我先生が「愚か者でございます」と口癖のように言われるのですね。私は初めのうちは謙遜しておっしゃっていると思っていたのですが、いつもそういう態度なんです。なんでそういうことをおっしゃっておられるのかなあということが心にかかっていたんですが、「愚か者でございます」と言われる人はたくさんいらっしやいますわね。たくさんいらっしやるけれども中でも曾我先生の場合はいつもおっしゃるのです。いつもおっしゃるのですけれども新たに響いてくるんです。“またか”という感じでなくて、不思議だなあと思っていたんですが、当たっているのか当たっていないのか分かりませんが、やっぱり「人間とは何か」ということが分からない、そういうところに身を置いておられたんじゃないかなと思います。

意識しておられるかどうかそれは知りませんが、先ほど申しましたように人間とは何かということが分からなくなっている、混沌としている、そういう時代の中にそっくり身を置いて思索しておられたんじゃないかな。あるいはまたそういう問題をかかえて南無阿弥陀仏の本願に触れていかれた。私が先生にお会いしたのは七十代になられた以降の曾我先生なんです。それ以前の私はまだ真宗の教えにご縁がなく、全然知らなかったんですが、七十以降の曾我先生にはずいぶんいろんなお話を聞かしていただいたりお宅に足を運んで行って、今熊野にありますけども、あそこにずいぶん行きました。ちょっとはつきりしませんが、始のころはあまり清沢先生の話はなかったように思いますが、後で曾我先生が語られたものがたくさん本になってそういうものをずっと読んでおりますと、どうもあんまり清沢先生のことではないですね。ところが晩年になられて80近くになったころ、ちょっと年のことははっきり、私はそういうことは苦手で、こういうことは宮城さんが専門家できっちりと年月日がはっきりしていないといかんと昨日話がありましたが、ルーズですからすぐ忘れてしまうのですが、しきりに清沢先生が御名を称される諸仏として曾我先生は出会われたのではないのでしょうか。それまでのことは知りませんが先生は先生にしても御名を称されている諸仏としての清沢先生を改めて確認されたのかも知れませんが。

とにかくそういう諸仏、南無阿弥陀仏の本願に称うていかれる。本願に帰し本願に生きていかれる、そういう諸仏に出会い諸仏の称名を聞いていかれた。聞名といいますかね。そういうことの中から生まれてきたのが、たまたま親鸞聖人の七百回忌の御遠忌ということが一つの機縁になって「信に死し願に生きる」という…。もちろんそれまでそういうことが全くなかったというんじゃない、ご承知のように「信に死し」というのは念仏の信ですけども、死ぬことのできる信を得たということですね。死ぬというのは計らいが捨てられることですね。計らいを捨てることのできるような、そういう信を賜る。そこに一転して願を生きる身になると。もちろん願というのは如来の本願のことですけども。

もっといえば先ほど修道ということを申しましたが、修道ということが願ですね。つまり人間を修道として見出したと。ということは人間に願を見出したということでしょう。人間はただ生きているということじゃない。人間の命を願としてね。如来の願といわれるような。ただいろんなことをしている間にいろんな願いをもったということじゃない、生まれながらにしてといいますかね。与えられるというそういう意味の命ですね。願。だから修道、人間とは修道、修道が人間なんだと。人間が何かの目的を立ててそれに向かって歩いて行くとそういう道もありますけどそれは枝葉の道ですね。もっと修道というのは、先ほど申しましたように何か目的を立ててそれを目指して歩いて行くと、何か道を修めて行くというんじゃない、人間そのものが修道なんだと。人間そのもの。存在そのものがね。だからその願に生きる、それがいわば願でしょう。修道ということでは言い表してあるのは、曾我先生が願に生きるという願はいうまでもなく阿弥陀如来の本願を言っておられるのですけどね。

ですからそこにいろいろな内容のものが展開してくるけど、元を抑えれば修道という言葉に収まるんだと思います。そのうえにいろんなことが展開してくる。修道の展開。ですから如来の本願を語っている經典でも、24願経もあれば36願経もある。私たちのこの真宗聖典に出ている『無量寿経』ですと48願ですね。そういうことがもう展開している願でしょう。どれが修道かというそういう意味じゃない。全体を貫いているのです。ですからそういう意味でいえば初めていろいろな計らい、とくに「信に死し」といわれるときの計らいは自分の信念が放棄されることです。自分のもっておる個人的なね。信念に生きることじゃない。普通は思想でも宗教でもそうですが、信念に生きるということが、ある宗教を信ずるといとき、信仰に生きるといいます。もし思想、社会主義とか民主主義とか思想に生きるという場合はその思想に対する信念、これが絶対正しい思想だと。正しい道理だと。そこにその道理の実現を目指していく。信念に生きるというようなものでしょう。ですから信念が堅いと、そういう人が立派な人だと、世間ではそういわれます。いや、念仏の信心も金剛堅固の信心というじゃないかと。

こういうこともずいぶん僕自身が誤解してきました。絶対壊れない信念をもって、そういうことで頑張らずいぶん人さまにご迷惑をかけてきました。その頃は迷惑をかけているとは思わなかったけどですね。それは今でも迷惑かけていますけどね。今はよろしいというものでもないけれども、徹底的に批判してね。今にして思いますけども、信念を固めていくということですね。

そこが大きな問題なんだと。何か宗教を信ずる、あるいは思想を信ずる、ごく日常生活でいえば自分の経験を、経験に執着する。自分の見たこと聞いたこと、自分の考えていること、そこに腰を下ろす、それが大問題だと。いったん腰を下ろしたらもう修道を失うのです。修道という言葉で言い表されているような人間を失っている。つまり足が止まりますね。人間とはこういうもんだとって、何かそれなりの宗教的信念とか思想的信念、あるいは自分の人生体験ですね。そういうものの上に座った場合にはもうちゃんと答えみたいなものが出てきて問うということを忘れます。尋ねるということ、そんなことを必要ないことのように。

ですから、信念とか自分の中に作り上げられている宗教的信念、思想的信念、経験にのっっている信念ですね。いろんな種類のものがありますけども、そういうものが放棄されるということですね。放棄できる。放棄せよといって放棄できるものじゃないけど、大体そういうものを失ったら腰抜けになるんじゃないかと思えますけど、根無し草みたいに。しっかり信念とか経験みたいなものにしがみついて腰を下ろしているんですけど、それを放棄させる。放棄させるということは、そういう信念の中に閉じこもっているという



ことをはっきりと自覚させるということですね。そういうことがはっきり自覚されるようになったら頑張る必要はなくなりますわね。自覚されてもなおかつ自分の経験や信念をとそんなことじゃない。つまり自縄自縛、自分で牢屋の中に入っている。ご和讃には牢獄といわれるでしょう。牢獄は牢獄でも、宝物で、七宝の牢獄ですね。それは私どもにとって信念とか経験というものはある意味で宝物ですから、そう簡単に手放せるものではないです。苦勞して築き上げてきたものをそう簡単に手放せるものではない。そういう意味で宝物で表してあるけれども、じつは牢獄なんです。そういうことを知らして下さる。そういうことに目をさまさして下さる。そういうことがそもそも仏法不思議といわれる所以ですわね。つまりできそうにもない、そんなことが出来るだろうかと思われる。つまり私どもでは予想できないことが一つの事実として成就する。そういうことを曾我先生は「信に死し」という言葉で言い表している。私どもに自覚できる死といったらこれしかないでしょ。火葬場に行く死は自覚できません。それも昨日大河内さんがそんな話ししていましたよね。それは自覚できませんわ。人が言っているだけで当の本人は全然自覚になりません。予感ぐらいは出来るかもしれないが、もう長いことないという、だけど自覚はできません。だから自覚できる死といったら、これしかないんじゃないですか。

浄土往生のあの浄土に生まれるということもそうですわね。自覚できる誕生です。この世に私たちが生まれてきたこれは自覚になりません。すでに生まれてきたとこういうことになる。それは改めて生まれてきたと今自覚するのであって、そのとき生まれてきたということは自覚できません。

そのような信に死し願に生きる。僕はこの言葉に触れたときに、ああ曾我先生という方は限りなく歩み続けて行かれる、そういう道を賜った方なんだなあ、つまり人間とは何かということが悪戦苦闘しながら、しかしそれがどのように簡単に分からないような問題であろうともその間を失わない。最後の最後まで、もうこの辺で卒業したということがない、それが願に生きるということですね。

## 七

いわばそういう願に生きるという人の上に展開しているのが四十八願というようなものでしょう。だから願に生きるというと、四十八願の中のどの願を生きるのかというようなそういう話じゃないですね。とにかくそういう人間とは何かということが本当に分からなくなったそういう時代ですね。そういう時代を本当に自らの、あまりそういうことを意識的に口に出しておっしゃっておられませんが、「愚か者でございませす」といつも言われながら問題を取り上げていかれるその姿勢の中に私自身が感じたことですが、人間とは何かというような、そういう問題にしぼって申しますと人間とは何かということを取りまくる間を失わない。またそういう間を失わせないような、そういう道をナンマンダブツから賜ったんだと。つまりそういうふうにご名を称していかれた。

もちろん曾我先生自身の態度は一貫して「聞名」ですけど、南無阿弥陀仏になっているその心、本願、それはその本願に称（かな）う、そういう本願に生きていかれたそういう人が明らかにしてくださっている。ただ本に書いてあるということじゃないですわね。そういう方々の言葉とか歩みがこの本になっていますけれども、つまり諸仏称名のその御名を聞く。自分で勝手に聞いているわけじゃない。その諸仏が親鸞という名であったり、曾我先生にとって。

おもしろいですね、「私はこれから親鸞とお呼びすることにしました」とかね。今までは親鸞聖人と言っていましたけど、これも一つの大事な覚悟といえますかね。昨日大河内さんが「友」という問題を注意していただいていたのですが、曾我先生が初めてじゃないでしょうか。現代人は人の名前をさまとか聖人とか先生というのを嫌がって、親鸞とかこういうんですけど、そういう意味じゃなしにほんとに諸仏として仰いでおる、つまり御名を称して下さっている、御名のいわれを聞かせて下さっているそういう諸仏の名として親鸞聖人の教えを聞いておられる。あるいはまた、そういう諸仏として清沢先生の名前が出てきたりしております。どこまでも御名を称して下さっている。そういう人を通して本願を聞く、御名を聞き本願に生きる。私どもの方からはそれがおのずからそれが御名を称するという形になってきますわね。願を生きるとい

うことになったときにまさに御名に称う、称名ですわね。

だから修道というようなことがまさにナンマンダブツの道によって修道としての一生涯というものが本当に成り立つ。またそういう一生涯をいただいていくということをもつて私どもに教えてくださっておる、そういう方が曾我先生なんだなあということをごいう「信に死し願に生きる」という言葉で言い尽くされていく、そういうご一生涯に私自身がお会いすることができた、何かそこに私個人の中では人間とは何かと問うようなこと、問う力がすぐ失われていくんですよ。分かったようなつもりになってですね。それがいろんな自分の経験を通してとか、ついついつの間にか腰を下ろしている、そういう私をひるがえしひるがえして、御名を称えてくださっている。諸仏称名を親鸞聖人は願力といわれますけど、本願力と。諸仏称名のほかに本願力があるのじゃなくて、諸仏称名がまさに本願力でしょ。願力というのは願に立たせるということですね。願に呼び返すといってもいいでしょう。

いま修道という言葉で申しましたけど、願に呼び返す。私どもを願に呼び返し願に立たせる、そういう力です。それは外ならん、そんな力がどこにあるのか、その力をあらわしてくださっているのが諸仏の称名ですわ。そういう私にとっての諸仏の称名という意味をもっているのが「信に死し願に生きる」という言葉の中に収まっている曾我先生の一生涯です。「願力の道」というような言葉がありますけども、願力の道というような道は私どもを歩かせる道を開いてくださる。何か歩けないような道じゃなくて、普通私たちは道といいますと、普通は何か目的を立ててその目的に向かって道を立てる、そしてそれを歩いて行く、こういうふうに考えがちですけど、願力の道、願力の白道、ああいう言葉で言い表されている道というのは道を立てるというよりも歩かせるのが道なんです。歩かせるほかに道があるんじゃない。私どもを歩かせる、人間とは何かと限りなく、それを道というんです。

どこかに道があってそこを歩いて行く、そういうことじゃない。どこだって歩くところはそれぞれ身を置いているところです。別のところにどこか道を探しに行くというのではなくて、それぞれが身を置いておる、文化の違いもあるだろう、宗教の違いもあるだろう、職業の違いもあるだろう、それぞれ身を置いておるところがあります。そこで歩けるかどうかでしょう。歩きやすいような道をどこかに見つけてそこに掛けて行くというのではなくて、本当に私どもを限りなく歩かせつづける、それを願力の道と。道があってというんではないんですね。だからそういう意味でいえば曾我先生の一生涯は願力の道を表してくださった。そんなら曾我先生のところにと曾我先生の後を追っかけて行こうとそういうことじゃないですよ。聖跡巡拝みたいなそんな話じゃない。

時間がきましたから今日はそういうところで。

## 第二講

—

おはようございます。昨日は“人間とはいったい何か”と、そういうことが問われておるような、そういう時代ではないかということを中心にお話し申し上げました。言葉を言い換えますと人間観が混沌としておる時代だといってもいいのではないですかね。その混沌としているという意味は、いろいろな人間観が立てられておるということが一つですね。そのことについては昨日人間学という学問で整理して取り上げてあることを参考に少しお話し申し上げましたけれども、「考える、それが人間だ」と。知性、理性、善いことをする。「信仰をもつ、それが人間だ」、霊性。「作る、それが人間だ」、働く、生産する。まだ取り上げればいろいろありますですね。

最近僕は「的」という言葉がだんだん嫌いになりまして、今度の題目も「僧伽的人間」と。これは最初に申しましたように私がつけた題目ではなくて与えられた題目なんですが、中国から来た人に聞いてみたら「的」という字は「の」という意味なんですね、中国の人が使う場合は。別にそんなことを配慮してということではなくて、考える、それが人間だ。あるいは知性、それが人間の本性だと。知性的人間とか理性的人間という言葉で言い表されていることを私なりの言葉でこういうふうに言い表したまでのことですけども。

それから善い事をする、それが人間だと。だいたい儒教に代表されるヒューマニズムですね。ヒューマニズムの人間観ですね。東洋では儒教に代表されています。それから信仰をもつ、それが人間だと。それを別の言葉では「霊性的人間」という言葉で表現されていますけれども。それから作る、いろいろなものを作る、世界も作る。もう自然界というようなものはないんじゃないですかね。人工的自然界。何らかの意味で人間の手がかかっている。そういう意味では「半自然」という言葉を使っている人がいますね。文化人類学の学者の方々ですね。

とにかくそういうふういろいろな人間観、これは昨日も申しましたように少なくとも人間観というときには、考える、それが人間だと。そのように人間を受け取っていく。ただ人間というものはそういうものだというある意味の考え方というんじゃないで、受け取っていくのが人間観です。まだ受け取らないときには人間観にもなってないわけです。とにかくそういう問題がありますけれどもいろいろな人間観が入り乱れているような時代ですね。そういう意味が一つ。それから二番目には、何らかの人間観をもつと、その人間観以外の人間観と対立したりあるいは排斥したりする。

それからもう一つは、第三番目には人間観というようなものを失っている。そういうことについては親鸞聖人が「逆謗の屍骸」というような言葉で言い表しておられる。そういうことを昨日はお話し申し上げたわけですが、その中でそこに大乘仏教の人間観ということ昨日は申し上げました。つまり「修道」として人間を見い出してきた。修道というのは昨日も申しましたように存在を問う、何か研究するという意味ではありません。いつでもどこでもどんなときにおいても自らの存在を問う。つまり自らの存在を掘り下げるわけです。あるいは掘り起こすといってもいいでしょう。これまで見い出されているものがあつたとしたらそれがさらにいろんな現実の問題を通して掘り下げられる。あるいは掘り起こされる。当然そこにこれまでの受け取った受け取り方の誤りとか間違いみたいなものが否定される。という形で掘り下げられていく。そういうことが存在を問うという意味なんですけども。そういうことが伝統的な仏教の言葉では「修道」という言葉で言い表わされているわけですね。

ですからこの大乘仏教の人間観もいろいろな人間観の中の一つだところっていいわけですけども、そこに大きな特色があるわけですね。それはどういう特色をもっている人間観かといいますと、「修道、それが人間だ」と。そういう修道というところに人間を見い出しているんですが、同時に「修道を放棄する、それが人間だ」と。こういうような内容を包んでいるわけです。つまりこの修道という言葉で言い表されるのは大乘の仏教ですが、その大乘の仏教では不退転、退転するという問題を取り上げられるんですね。

昨日そのことについて…、もはや退転しなくなった、限りなく自分自身を問い続けると。なかなかその、どんな出来事の中でもどういうところにおいても自らを問うということは容易でないです。たいてい何か嫌な出来事が起こりますと、その出来事の責任は向こうの方にもって行きます。自分を問うなんてことはほとんど不可能といっているんですけども、その自らを問うことに退転しない。それを「菩薩」という名で言い表されているのですね。

ところが菩薩十地、退転しないというところに立ったそれを「初歡喜地」といわれますけども、「七地沈空の難」といって、ここにもう一つ問題がはらまれている。退転しない菩薩になったらそのまま一つと行くのかというところとそうでないもう一つ第七地において空に沈むと。こういう問題が取り上げられている。ですから七地までの菩薩のことを「浄心の菩薩」といわずに「未証浄心の菩薩」とこういう名前でも言い表してある。そのことが『教行信証』の「証の巻」に取り上げられてあります。もう開きませんが。

八地以上の菩薩については「浄心」とか「上地の菩薩」という名前でも言い表してあります。そういう問題を取り上げている『浄土論』の教えを受けて曇鸞大師がその心、問題を明らかにしておられる。そういう『論註』の文類が「証の巻」に取り上げてあります。今その内容のことは申しませんがとにかく退転するという問題が取り上げられているですね。ですからそのことを言葉を言い換えますと人間とは修道が人間なんだと。限りなく自分自身を見い出していき、それが人間なんだと。が、同時にそのことを放棄するのがまた人間なんだと。つまり退転するのが人間なんだと、こういう人間存在の病を取り上げておるですね。病という言葉をとくに表に出して取り上げておられるのは親鸞聖人ですね。「難治の病」、治り難い病、こういうですね。

このことも「証の巻」の終わりの方にそういったことが取り上げられております。これもお昼休みにでも開いて見てもらえばいいと思います。

いま私が申し上げたいのはそういう矛盾する、人間存在というのはそういう矛盾をかかえている。こういうことを明瞭にしている人間観なんですね。つまり退転するとかいうことをただ排除するんじゃないで、そういうものをただ取り除くと、たんにそういう意味じゃなくて、退転してしまうというそういう問題、つまり言葉を換えていけば、人間を修道とみる眼でいけば、その修道としての人間を疎外する。人間は自ら自身を疎外しておる。こういう矛盾を抱えている。そういう事を明瞭にしているという意味で非常に特色もっている人間観だと、こうっていいんじゃないでしょうか。その特色というのは他の人間観よりもすぐれているというたんにそういうことじゃなくて、他のもろもろの人間観を包みうるそういう特色なんです。他のさまざまな人間観を包みうる大事な一点が病に眼を開くということなんですね。

## 二

僕はよその国のことはあまり詳しく知りませんが、病気に対する関心というのがものすごく強い、またそういう情報が、いろんな情報がいわゆる病気とか健康に関する情報があふれているのが日本じゃないでしょうかねえ。よその国もこんなふうなんでしょうかねえ。行ってみなけりゃわからないけど、ちょっとこんなにあるだろうかと。ある人に聞いたら、日本人ほど薬を飲むものはないのだそうですから、それも話だからはっきりしたことは知りませんが、なんだかカロリーとかビタミンとか栄養とかについての知識がふんだんに洪水のように流れている。病気についての関心が強いだけじゃない知識が豊富です。お医者さんも顔負けするくらい豊富ですわね。東京に聞法会にきておられるお医者さんがいらっしゃるのですが、そういう方々がよく話されます。“もうびっくりします”と。向こうから薬の名前を注文して、こういう薬をくださいと。だから時々だまして何も効き目のないメリケン粉のようなものを上げるんですけど、それは笑い話ですよ。ほんとかウソか知らないのですが、つまりその人の薬中毒にならないようにと。眠れないから睡眠薬くださいとかあるんだそうです。とくに精神科のお医者さんが来ていますからその先生方がそんな話をされるんですが、それは偽物でも眠るんだそうです。“これは効くよ”と。まあそんな事はともかくとして、病気に対する関心が強い。つまり体の病、心の病ですね。心については精神科だけではなくて、診療内科というものまでありますね、この頃は。どこが違うのか僕はよく分からないけど。いま人間の病として取り上げられるのは存在の病です。在り方の病です。別に体が健康な人にはないというそういう病気じゃない。かえって健康な人ほどある意味ではかかえておる。健康に自信をもって、病気がちの人はやはり生きておることに自信がもてないからかえって生きておることを尋ねていこうとなさる機会が、きっかけが開かれることが多いですけども。こういうことはどちらがどうということはありませんけれども、何れにしても体の病とか心の病という問題ではないんです。

こういうこともよく勘違いされるんじゃないでしょうか、宗教が取り上げるのは心の病だと。心といってもいろんな内容がありますから、簡単に片付ける訳にはいきませんが、いわゆる心の状態の病みたいなそういう意味で言葉が使われているとしたら、他の宗教で取り上げるのはそういう問題かもしれません。心の状態が安らかになるとかですね、だけど今少なくとも大乘の仏教、修道というところに眼を開いている大乘の仏教が取り上げる病というのは退転する。つまり足が止まってしまう。自分の経験とかあるいは自分の考え、それが宗教的信念である場合もある、あるいは思想的信念である場合もある。そういう考え信念に腰を下ろしてしまう。親鸞聖人は正信偈の中でそういう在り方をしておるものを「邪見驕慢悪衆生」といわれます。

とにかく私どもがこうして生きている在り方そのものがかかえているような病です。それは頭がいいとか悪いとか能力があるとかないとか、いいことをしたとか悪いことをしたとかそんなことは関係ない。いいことをしておるひとであろうと悪いことをしておる人であろうと、あるいは男であろうと女であろうと、知識人であろうと知識がない人であろうとそういうことは全く関係ない。むしろどのような人であろうとそれを

免れることができない。というような在り方です。

で、なかなかそれは気が付きませんから、闇という言葉でよく言い表されています。「無明の闇」というですね。それも永遠の闇という意味では「無明長夜」と和讃にありますね。正像末和讃に「無明長夜の燈炬なり」とありますけど、長い長い夜です。生まれてから後そうだったというのではない。その中に生まれてきたとっていいような、生まれながらにしてかかえている。曇鸞大師は「千歳の闇室」という言葉を使っておられますね。あるいは「信の巻」の終わりの方に曇鸞大師の言葉が取り上げられています。

この病は科学技術では治らない。あるいは宗教的な呪術。体の病とか心の病も科学的技術あるいは呪術で全部治るかといえば、必ずしもそういうもんでもないけれど、あるていど治りますよね。まだどうしていいかわからないこともあります。私「ぶどう膜炎」という目の病気をかかえていますけれども、片っぱの目はぜんぜん見えません。見えるように見えるかも知れませんが。こちらの方に人がおられるとぜんぜん分からないんです。炎症が起こるといろんなところが傷ついていくんですけど、どうもお医者さんに聞いてみるとはっきり原因が分からない。まだね。こうではないか、ああではないかという一応仮説みたいなもの、検討がつけられて、多少炎症を止めるということについての薬がかなり研究されてある程度のもので現在ありますけれども、そういうようなことが体全体についてもありますよね。

それから心の病についてもそうです。薬を一服飲みますと今まで悩んでいた人が急に朗らかになって、そういう薬もあるそうですね。それをお医者さんにきいたら「一服上げましょうか」なんてこの前言われました。「私らが飲んでるんです」といわれるのです。というのは病院にもよりけりですけども、100人から150人くらいの精神科の病気をしている患者さんを一人の先生が担当している。話を聞いているだけでしまいにはくたびれて、こちらの方がおかしいんじゃないかと。つまりこちらの考えとぜんぜん違う話がどんどん聞かされるわけですからね。そんなことで落ち込んだりすると精神安定剤を飲んだり、私たちが方が睡眠薬を飲むんだと、そういう話をしておられたんですが、愉快になる薬もあるというておられました。

そういう意味で落ち込んだ心をちょっと愉快的気持ちのいい状態にするとか、一時的でしょうけどね、そういうことは科学的技術だけではなくて、呪術でもありますね。念仏でもそうじゃないでしょうかね。私やったことはありませんが朝から晩まで「なんまんだ、なんまんだ」と唱えていると多少いろんな効果が出てくるんじゃないでしょうか。悩みがどこかに吹き飛んで、そういうようないわゆる心の病とか心を安定させるとか体の調子がよくなるとか、そうではなくて在り方自身がかかえている。昔からの言葉でいえばいわゆる自分の分別、自力の心に縛られるという言葉で言い表されているのがそのことです。自分の経験、見たこと聞いたこと、自分が見たこと聞いたこと、自分が経験したことに縛られる。そこに腰を下ろしてしまう。それが宗教的信念とか思想的信念になるとなってお厄介です。非常に強いものが出て参りますよね。経験に固執するという場合も、そう簡単に負けやしませんけどね。やっぱり自分よりも能力があると思われる人とかちょっと意見が豊富、自分よりもいろんな苦労した経験をもっておられる人の前に行きますと、頭が下がらないまでも、ちょっとたちうちできないという感じです。それでも自分の小さな経験をがんばりますけどね。だけど宗教的信念とか思想的信念になりますとそんなことを飛び越えてしまいます。絶対自分が正しいというところに立つ。そういう病です。

その病は気が付かないばかりでなく気持ちがいいわけですから、ある意味では。自分が苦労に苦労してきた自分の経験の積み重ねのうえに何か開かれてきた世界みたいなものですからね。

ですからそのことは昨日も少しお話ししましたように、金の鎖で牢獄の中につながれている、というようなそういう和讃、506 頁から 507 頁にかけて出ています和讃をお読みになりますとたくさん出ています。非常に居心地がいいから「胎宮」とか「宮殿」という言葉になっています。

私自身がこの真宗の教えを聞くようになって、始めはもちろん分からないことばかりでしたが、驚いたのはこういう問題が取り上げられているということでした。なかなか治らない。そういう病をかかえている。生きていくこと自身がそういう病をかかえている。そういう問題を取り上げてくださっている。

そのことがとくに主題といたらいいんでしょうかね、到底治らないような病をかかえているそういうことが主題として取り上げられている。それが念仏の本願じゃありませんかね。ナンマンダブツの道というのは。ナンマンダブツになっている本願、第十八願と呼ばれていますけれども、「唯除五逆 誹謗正法」という言葉が出て参ります。本願の、「唯五逆と正法を誹謗するものを除く」と。今ここでいえばこの修道ということで言いますと、人間の一生涯は修道だというようなことさえも、そういうことにももう心をかけていないような、全くそういうことに背いている、そういう病をかかえているそういう人間の問題が主題として取り上げられているのがナンマンダブツの道じゃないでしょうかね。

それは大乘の菩薩道においてももちろんそれはいうまでもなく、いかにすれば不退転の位が勝ち取れるかということで絶えず問題になってきているんですけど、そういうことがさらに掘り下げられて、どう言ったらいいのかなあ、たんに発心してそういう修道としての道を歩み続けて行こうと思立った人、そういう人々の問題というよりか一切の人々の問題としてさらに掘り下げられる。そういう意味をもっているのじゃないですかね。

そしてほんとに病をかかえている身、そこから生まれ変わっていく。生まれ変わるというと、病のない人間になるというそんな意味じゃないですけどね。どう言ったらいいですかね、病をかかえている身に目覚めるということがもう生まれ変わる第一歩ですわね。つまりそういう病をかかえているということを照らし出してくださる。それがいわば仏さまの智慧といわれるものですね。ですからその病をかかえている身に目覚めるということは、別の言葉でいえばそういう仏の智慧によって立つ、仏の智慧に帰依する。つまり私どもの立場が変わるわけです。立つ場所がですね。生まれ変わっていくということは今まで立っておった、どこに立っておるのかと申しますと、立っておるともほんとはいえないけども、まあ一応いうならば自分の心のうえに立っている。いつも自分の心がいろいろ思うこと考えること、そこに立っておる。そういう私どもが仏の智慧、大悲の智慧といってもいいですね。

この智慧は外から見ている智慧ではないですね。大悲というのは、引き受けると。その身をそのまま引き受ける。引き受けるということの中から開かれてきている智慧です。引き受ける、大悲。もちろん引き受けるといっても肯定している意味ではないですね。悲しむ、痛む。だけど悲しむ痛むからそういう姿を取り除いてからというのではなくて、その病をかかえておるその身を悲しみ痛む。悲しみ痛み引き受ける、悲ですわね。悲というところに現実のいろいろな人間の関係とか、人間と法の関係とかそういうような関係を悲というところに見出し出てきているのも仏教の特色じゃないでしょうかね。親子夫婦の関係も悲というところに。「小悲」という言葉でいわれますね。

もちろん小というときには一つになって引き受けるという意味ではありませんけれども、二つに分かれているわけですから。だけど思いが通じないとかね。けっして必ずしもこちらの思いのようになってくださるわけではない。極端な言い方をすれば愛し合っているどころか憎み合っている。それでも、憎み合っておるにしてもその関係を捨てない。それは悲でしょう。関係を保っているのを悲です。憎いからあなたと別れまじとかね、憎いから離れまじとそういうことじゃなくて、意見が合わないとか憎いとか、そういうことがあったにしても、その関係は捨てられない。その関係を捨てることができない。それが悲という言葉で表されているといっているわけでしょう。

そういう小悲のことはともかくとして、大悲という場合には一つになる。それをもって自分の生きる場所とする。その大悲を象徴されるのが「華座」でしょう。仏さまの下の、足元が華の座ですね。仏さまというのはどういうところに立っておられるのか、泥の中に立っている。華座というのは泥の中に、蓮華に譬えるなら泥の中に、泥沼のような衆生の身を己の生きる場所としている。己の命を養ってくださるそういう場所としていただいております。そういう仏さまの姿を曾我先生は「阿弥陀仏南無」といわれるですね。仏は私たちに先立って南無してくださっている。こういわれるんですわ。それで阿弥陀仏南無。私たちは南無阿弥陀仏。仏さまは阿弥陀仏南無。

これは曾我先生が初めてということではないですね。先立っているのは親鸞聖人ですね。親鸞聖人が念仏の行、念仏になっている行、五念門の行といわれますけれどもその五念門の行は菩薩の行、法蔵菩薩の行と

していただいております。ただ私たちが行ずるというのではなく、私たちに先立って法蔵菩薩が礼拝してくださっている。礼拝、讃嘆、作願、観察、回向という内容ですが、そういうことを親鸞聖人が明らかにしておられる。ですから『教行信証』をお読みになって五念門の行が取り上げられている。例えば『浄土論』にしても五念門の行のことが取り上げられている文類にしても、それらを親鸞聖人は読みかえておられますわね。「～したもう」とかね。敬語になっています。私たちが礼拝するとかいう意味でなくて、礼拝したもうと。

そういうことはともかくとして、かわいそうだから泥沼に立っているとそういう意味じゃない。そこが仏にとって、如来の命を養い育ててくださる場所。そういう意味でいえば南無です。阿弥陀仏南無と。そういうことを象徴して表しているのが華座です。韋提希夫人が仏に出会ったというのは華座に出会った。仏に会うことを見仏という。仏を見たてまつる。見たてまつるというのはこちらから見たというより仏さまが姿を現してくださった、こちらにですわね。そういう意味ですが、要するに仏に出会った。その姿を、空中に住立したもう仏さまに出会ったとかいう表現で『観無量寿経』に語られています。

結局、泥沼、韋提希の言葉では「濁悪処」という言葉でこのような濁悪処にはいたくないと。つまり息子から背かれ悲劇が次々に起こる。こんなところにもう居りたくないといって救いを求めた韋提希に対して、あにはからんや、その濁悪処といわれる処を座としてくださって、韋提希にとってはどういこんな処は生きる場所とは思えない。どうい生きられる処とは思えない韋提希の方はそうですけど、ところがそこが仏の命が育てられていくそういう場所であることにいわゆる眼を開いた、これが『観無量寿経』の「第七華座観」といわれているところですね。ここは宮城さんみたいに丁寧にお話ししなけりゃいかんのですが、勘弁してください、飛ばしていきますけども。ページだけ申しておきましょうか。後で経典をお読みになる方はゆっくり読んでいただいたらいいと思いますが、101 ページですね。

そういうことが大悲を象徴しているですね。なにも泥沼のような場所は結構な処だとそういう意味ではないですけど、まことに悲しむべき痛むべきところ、しかしそこでお命を頂戴していく、それが仏さまの大悲です。その大悲の智慧です。私どもが病をかかえているということも、何も冷たく人間とはつまらんものだと、だいたい在り方がなっていないと。自分に縛られているとか冷ややかに外から見ている目ではなくてほんとにそれを引き受けていく、そういう大悲の智慧です。その大悲の智慧によって立つ。立つ場所が変わることですね。こりんざい変わるとは思わなかった、自分の心に立つというようなことはこりんざい変わるとは思えない、そういうその私どものうえに生まれ変わるという、生まれ変わるというのは仏の大悲の智慧、平凡な言葉でいえば仏の心に立ち返る、仏の心によって立つ。それがまさに生まれ変わるということでしょう。その生まれ変わっていくことに道程ということをお親鸞聖人は教えてくださっていますね。「三往生」ということを教えられるのはその生まれ変わるということに、生まれ変わっていくその歩みにやはり道程をもっている。知らない間に生まれ変わったというのでなしに、道程というのは自覚がある。どういうことが自覚されていくのか。何か知らない間にいつの間にかお浄土に行ったとそんなことでなしにはっきりした自覚ですわ。生まれ変わるというのはどういう自覚、どういうことがどのように自覚されていくのか、そういうことを具体的に取り上げてくださっているのです。

とにかくそういう病をかかえているそういう私どもを大悲する、そういう大悲の本願です。南無阿弥陀仏の本願。しかもそういう病というのが限られた出家の修行者というのではなくて、むしろ広くあらゆる人々がかかえているそういう問題を大悲し、本当にその人間が生まれ変わっていくといえますかね、そういう道を教えてくださっているのがナンマンダブツの道じゃないでしょうか。またそういうことを証して私どもに教えてくださっているのが諸仏といわれる善き人々、昨日は曾我先生のことを、少しそういう意味でお話しさせていただきました。

#### 四

「僧伽的人間」というテーマをいただいたのですが、昨日申し上げましたようにこの言葉は安田理深先生が念仏によって成就するそういう人間を「僧伽的人間」という言葉で言い表されたんですね。そしてただ言葉でそういうことを言い表されただけじゃなしにご自身がいわゆる僧伽的人間になっていかれた。僧伽的

間でどんな人間のことかといえば師をもち友をもつ、ごく平凡な言葉でいえばそういう人のことですね。それだけでは十分につきませんがとりあえず申し上げますとそういう師をもち友をもつ人である。

今回十分にそこまでお話し仕切れない、まだ私の中でもやもやしているものがありまして、はっきり言い切れないものがあるんですが、先ほど修道ということをお申しあげましたが大乘仏教の人間観は人間とは修道だと。修道的人間。人間とは修道だということをお明らかにしてくださっている人間観ですが、それを安田先生が否定しておられるのではないのですが、それを受けた形で「僧伽的人間」という言葉を使っておられる。こういうふうには私は受け取っているわけです。ただ修道的人間イコール僧伽的人間という意味じゃなしに、そこに僧伽的人間とこういう言葉をあえて安田先生がお使いになっておられるのは、修道的人間と別のことをおっしゃるわけではないけれども、むしろ修道的人間といわれる場合にそこにかかえられている問題ですね。

先程申しました病をかかえている。そういうむしろ病をかかえているものがその病をかかえて立ち上がっていく。それも一部の修道という名で表されておるようなそういう道を目指して、発心して立ち上がったそういう人だけの道ではなくて、むしろ修道というような言葉にもある意味では縁をもっていないといってもいいような、あらゆる人々の中に修道というようなそういう一生涯、修道的人間を成就していくようなそういう意味を言い表そうとしてくださっているのが僧伽的人間という言葉でないかなあと。だから別に発心したとかしないとかそういうことをもう一つ越えて師をもち友をもつ、そういう人を成就する。そうすれば師や友がその病を照らし出してくださるしまた生まれ変わっていく道を師や友が引き出してくださる。自分で一生懸命努力して病を克服していくというような、じつは菩薩道というのはそういう永遠の修行をするわけですね。

そういうことでなしにわざわざ僧伽的人間というような言葉を安田先生が使われるのは、個人の努力で、個人が努力し個人が一生懸命修行することによってそういう修道的人間というような人間になっていくということではなしに、むしろどのような人であろうとその人を修道的人間として育て上げる。そういうふうには育てられてくるこういう意味を僧伽的人間という言葉で言い表しているのではないかなあと。私の個人的な了解といえば個人的了解かも知りませんからそれ以上のことは申し上げることはできません。

とにかく師をもち友をもつ。事実安田先生自身が金子先生をはじめとして曾我先生の教えを聞くというふうになっていかれるのですが、そういう諸仏の称名ですね。諸仏が御名を称していかれた。その諸仏の称名を聞く。つまり師をもつ。そういう意味では安田先生の一生涯はいわゆる「聞名」ということに尽きているですね。とくにその名といっても諸仏が御名を称していかれた、とくに諸仏といっても安田先生の場合はそこに曾我先生ということが、もちろんその背後には親鸞聖人ということがあるわけです。直接には曾我先生です。曾我

先生が南無阿弥陀仏の本願に称(かな)う、そういう道を歩いて行かれた。その曾我先生を通して御名を聞くと。本願を聞くと。生涯そういう師をもち友をもっていかれた。そういう意味では念仏の道は僧伽的人間を成就するというようなことを、自身がそういうことを表しておられる。そういうことの中でとくに曾我先生が願に生きると。その願に生きるということをさらに安田先生は具体化して「不安に立つ」といっておられますね。「不安に立つ」という題目でまとめられた本もございますね。日蓮宗の茂田井さんという方と対談されて、対談といってもほとんど安田先生の話ですが、茂田井さんがところどころ、ちょこちょこ何か言われると安田先生の話がずっと続いていて、対談かなと思うような本ですが、まあ本になっていますね。

別にあの本だけじゃなしに、ときおり、もっといえばよく「不安に立つ」ということを取り上げておられました。つまり私たちが直面する現実ですね。それは決して何事も起こらないような現実なんじゃなくて、いろんな悩み事が起こったりいろんな事件が起こったりする。その現実そのものに立つと。問題になるような現実をなんとかしようとする方にだけ心をかけているのではなくて、何かをするにしてもまずその現実には立つ、まずね。身を置くと。その場合にはただ置けるものじゃないですね。そこに身を置けるような自分になっていかなきゃ。少なくともいろんな家庭問題でも社会問題でも、何か問題が起こりますと困った問題だとか何かそれを批判する立場になったり、受け止められない。受け止められないから問題になるわけですね。ただ受け止められないまま問題を取り上げていくというのではなくて、受け止められるようなものになっ



ていく。その全体をですわね。

つまり自らをひるがえし自らを新たに見い出していく。そこに身を置くような自分自身です。そういうことを安田先生はティリッヒと対談なさったということもあって「存在への勇氣」というティリッヒの言葉をよく取り上げていました。要するに存在を問うということですね。自分自身を掘り下げるといことです。これまでの自分を良しとするのではなくて、むしろ新たな現実のさまざまな問題を通して、自分自身を掘り下げる。あるいは掘り起こす。そういう勇氣です。そういう勇氣を表しているのが願でしょう。「願に生きる」という場合の。私たちの勇氣というようなものじゃないですね。何か存在を問うというような、存在を問うということがそもそも願です。つまり何時でもどんな時においてもです。自らの存在を問う。まさに賜った如来の願とこういわれる。何か自分が考え出した願ではないです。自分の思いを破って出てくるような願です。

だからそういう願が物語られる場合に如来さまの方が自分自身を破って出てこられると。存在を問うといつたって如来の方が先にその存在を問う。自分のことは棚上げにして人はどんな生き方をしているとかそんな事をいっとるんでなくて、自分自身を問うという形で、そういうことが方便とかそういう言葉で言い表されているわけでしょう。これは宮城さんが取り上げてくださっていますから、いろいろお話があるでしょう。自分は棚上げ、自分を変えないとそういうことじゃない。自分は絶対なんだとそんなことじゃない。どこまでもいろいろな現実を通して自らを掘り下げる。掘り起こしていく。

## 五

こういうことが「展開する本願」と安田先生はいわれたけども、本願が展開するというのはそういう姿でしょう。24で表されたり、36で表されたり、48で表されたり。ですから勇氣といっても私の勇氣というものじゃないですわね。限りなく存在を問うと。それこそ混沌とした人の世、混沌とした社会に身を置く、置いていく。“共に生きる”という言葉がありますけど、衆生と共に生きるという言葉で表現されていますが、共に生きるということは“成ること”ですね。衆生と共に生きるといったら、如来が衆生に成ることです。それが願という事で表されている内容です。ですから願に生きるということは私どもがはじめて願に促されてこの五濁悪世とかいろんな言葉で言い表されているそのこの世、一切の人々と共に生きる。

それこそ五濁の世と言われているそういう世を自らの住家とする。親鸞聖人が『歎異抄』の中に言い表している言葉がありますけど、「地獄は一定すみかぞかし」と。ああいう言葉はたんなる開き直っている言葉じゃありませんわね。“どうせわしらは地獄じゃ”といって開き直っているのではなく、あの言葉の底に流れているのは願でしょう。如来の願に出会ってればこそ、ああいう言葉が出てくるわけでしょう。つまり流転する社会を自らの住家とする。

不思議なもので私は『歎異抄』のその言葉に初めて感動したのではありませんが、あの言葉に感動している人がいらっしやるですね。今どうしておられるか最近一向にお会いしませんから分かりませんが、フランスからきたジャクリーンさんという人がそういうことを言っていましたね。ずいぶん一緒にあちらこちらに行ったこともありますし、一緒に泊まってお話を聞いたこともあるんですが、そういういろんな話を私に聞かしてくださったのですが、それはそれで深い願を感じられたんじゃないでしょうか。ただ「地獄は一定すみかぞかし」とそういう居直ったみたいなそういう言葉として受け取っておられるわけじゃない。

まあ、ひとのことはともかくとしまして、親鸞聖人ご自身の言葉に触れても、『教行信証』の中に出てくる言葉というのはそういう言葉ばかりですね。たくさんありますからいちいち取り上げているときりはありませんが、「信の巻」に出ている言葉で申しますと「常没の凡愚・流転の群生」ですね。文類の中には、いろんな方々がお書きになった文類には「人」とか「人身」とかそういう言葉が出てきますけども、『教行信証』のご自釈、親鸞聖人ご自身の言葉にはそういう言葉がひとつもありませんね。必ずこういう「常没の凡愚・流転の群生」というように、つまり人といっても抽象的でないんです。常没の凡愚・流転の群生。驚くほど『教行信証』をずうっと開いて見るだけでも“人間は”というそんな言葉は一言もありません。「流転の群生」

というのはこれは社会を表す言葉ですね。群生海。たんなる個人じゃない。それこそ自らの住家です。自分の住んでおるところ、身を置いているところ。

そこは不安といえば不安の真っ只中、安定している世界じゃないですね。しかしそこに身を置く。そこが新たに自分自身を見い出すところ、新たに世界が見い出されるところです。「常没の凡愚・流転の群生」といわれるそういうものにおいて果たし遂げられていく使命といいますかね。ほんとに思いがけなく大事な仕事をいただいている。そういうことを「信の巻」では「無上妙果の成じ難きにあらず、真実の信樂実には獲ること難し」とこういって、獲ること難き真実の信樂、いわばそういうことを曾我先生は「信に死し願に生きる」と言っておられるわけですね。真実の信樂を獲ると。

何か特別な人間というのでなくて、師をもち友をもち、それこそ人間の身がかかえている病に眼を開いていく。これは安田先生にお会いになった方、講義録などをお読みになればきっとどこかに出ていると思いますけど、「僕はまだ学生なんだよ」といってですね、講義録の中でいわれたことがあるかどうかそこまでは記憶がないけど、何遍となしに面と向かって言われた覚えがございますね。「君たちは大家になっていないか」といってですね。いやあ参ってしまうですね。「僕はまだ学生なんだよ」といって大きな問題をいただいている。たずね続けて行く。そういう言葉の中に非常に深い喜びを表現してくださっておった。嬉しいとはおっしゃらないけどですね、深い喜びというのは、どう言ったらいいのですかねえ、これも言葉がないんですけど、悲しみを抱えているような喜びじゃないですかね。ただ嬉しいというばかりじゃなくて。そういう先生の姿が忘れられませんけどね。

とにかく師をもち友をもち歩み続けて行く、だから自分に力があるかないかではない。自分がどれだけ努力しているかしていないか、そんなことを直接評価するんじゃなくて本当に師をいただき友をいただく。また、それさえ出来ればと、それも自分の努力でできることじゃない。先生がほしいとさがし回ったって簡単に見つかるもんでもないでしょ。なかなか見つからない、見つからないどころじゃない、目の前に仮にいらっしやっても先生と思わないということがあります。そういう私どもに師をもち友をもつようなそういう眼、態度といってもいいと思いますけど、それがナンマンダブツの道ですわね。南無の心を開く。南無の心というのは師や友から賜る心でもあるけれども、自分でできるというものでもないですね。師や友から賜る心ではあるが同時に南無の心が師や友を見い出してくる。南無の心のないところに師や友なんかあるはずない。それは師や友といっても自分が適当に利用しているだけであって、生涯の師、生涯の友、つまり仏なきところで仏を見い出していく。別の言葉でいえば師なきところに師を見い出す。法なきところで新たに法を見い出す。

なかなか友だちが見い出せない、そういうところにおいて自ら友になるそういう力を賜る。そういう人を安田先生は「僧伽的人間」という言葉で表現しておられるのですかね。そういう人を成就してくださる世と。別に修道といって肩を張らなくても自ずから修道といわれるものが成就してくる。身は凡夫の身でありながらですよ。

ですから「僧伽的人間」という言葉にはもう一つ大事な内容は、やはり釈迦諸仏の弟子というようなことも同時に内容としては言い表そうとなさっておるんじゃないかと思われれます。たんなる釈迦の弟子ではないですね。わざわざ釈迦諸仏の弟子とこういわれる場合には、たんなる釈尊の教えを聞く弟子とこういうのじゃなくてやはり御名を称する、諸仏称名という言葉がありますけれども、御名を称してくださる人々の弟子となる、御名を称してくださる人々から御名を聞くということですね。

ただお釈迦さんの教えを聞くというたんにそういうことでなくて、ですから非常に広がりますですね。ただ一応いえば、釈迦諸仏といわれるときの諸仏は代表的には七高僧で代表されておりますけれども、しかしただ七人に限ると、限定される必要のないものでしょ。御名を称する。そういう御名を称してくださるそういう人々に聞くと。いわゆる聞く人ですわね。いろんな人々から聞くとこういうんですね。

もう一つは釈迦諸仏の弟子というときには大事なことは釈迦諸仏の歴史ですね。釈迦諸仏の歴史というようなことが「正信偈」になって表されていますけれども、その釈迦諸仏の歴史をいわゆる我がための歴史としていただいて、「仏恩の深重」というああいう言葉で言い表される具体的な内容はそういうことじゃないで

しょうか。「深くして重い」重なっているわけでしょう。「重い」ということはただ重いというだけじゃなくて、重なっている。いろんな人が世に出てくださってですよ、南無阿弥陀仏の本願を明らかにしてくださっている。もっといえば我らの本願をですよ、南無阿弥陀仏の本願というとか特殊なように聞こえるけど、要は我らの本願でしょう。我らの本願が南無阿弥陀仏になっているのであってですね。南無阿弥陀仏こそ本願。本願こそ南無阿弥陀仏とこういうような意味をもっているものでしょう。

私どもは、南無阿弥陀仏こそ本願、そういうことひとつでもなかなか受け取り切れないでおるということがある。何か本願がまだ別にあるように思っている。南無阿弥陀仏こそが本願。そういう私どもに繰り返し繰り返し、重ねがさね、いろんな方々が南無阿弥陀仏こそ本願。本願こそ南無阿弥陀仏、突き詰めていけばそのこと一つをずうっと明らかにしてくださったその歴史が一筋に伝統されておる。その全体を「仏恩の深重なるを念じて人倫の弄言を恥じず」と。「人倫の弄言」というのは『歎異抄』によりますと「善もほしからず悪もおそれず」ですわ。善もほしからず悪もおそれずといったら人倫から批判を受けますわ。そういう意味では『歎異抄』は恐ろしいことを言っていますね。「本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」。

僕はそういうことに驚くようになってから以降ですけども、どうして『歎異抄』がはやるんだろうかと思いましたね。こんな『歎異抄』がどうしてはやるんだろうか。どこを讀んでおられるのだろうか。『歎異抄』『歎異抄』というけれども、それは何も私が直接言い出したというよりも亡くなった信国淳という先生が専修学院の院長になられたときに、縁あって私もその学院の仕事のお手伝いをしながら勉強させていただいたのですが、ここに（岡崎別院の隣接地）住んでいました、一緒にね。その信国先生がときどき言われていました。“宗くん、どうして『歎異抄』がはやるんだろうね”と。“えらい『歎異抄』がいろんなところに取り上げられるけれども”と。よく讀んだら恐ろしいですわね、他の善も要にあらず、悪をもおそるべからず、と。

そういうすべてが、とくに悪ということになれば、悪いことが改めて人間を問う大事なきっかけになる。あるいは世界を新たに見出すきっかけになるわけでしょう。今日そういう時代じゃないですかね。そちらの方を差し置いてくると、ただ嘆くだけで終わります。大変な世の中になったとってね。そうでなく人間とはいったい何か、何が人間だったんだろうと。何者かと。神の子といわれる人もあるけど、いったい人間は神の子なのか。それとも鬼なのか。悪魔なのか。それともヒューマニズムでいわれるいい人なのか。何かそんなことを全部引つくるめて問い返してくるような時代でしょう。大きな大事な契機ですわね。そういう眼差しでほんとに現実そのものをいただいていく、現実そのものの中に身を置いていく、そういうことを安田先生は「僧伽的人間」という言葉で教えてくださったんだなあということをおもいます。時間が参りましたので。